

2025年2月23日 第二礼拝

説教題「信じる自由・信じない自由」フィリピの信徒への手紙2章12～13節

主任牧師 加藤 誠

「あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行わせておられるのは神であるからです」(フィリピ2:13)

『聖書教育』の2025年2月号の巻頭言の文章が心にとまりました。西南学院中学校高等学校教師で聖書を教えている三上梓さんが中学一年生の息子について書いた文章です。息子さんは小学校一年生の時に信仰告白をしてバプテスマを受けましたが、最近になって「もう学校には行かない。バプテスマを受けてクリスチャンになったという事実を否定したい。神さまなんて信じない」という言い出した。「これが思春期か！」とハッとさせられつつ、さてその息子にどう答えたものか。「教会に行かないなんてありえない！信じないとは何事か！」と全否定するのは違うし、かたや「いいよ、いいよ、行かなくていい。信じる必要もない」と全肯定するのも違うな、と。悩んだ結論としてこう伝えたそうです。「そうか、君はそう思うんだね。ぜもお父さんは教会に通うよ。神さまを信じているから」と。

クリスチャンにとって信仰を子どもにどう伝えるのかは大きな問題です。自分の大切にしているものを理解し、できれば同じ信仰をもって歩めたらいい。これは素朴な思いであり祈りでしょう。一方で信仰を巡って家族との間にすれ違いや衝突、葛藤を抱えることは誰もが経験することではないでしょうか。「見えない神を信じる／信じない」。信仰というものは理屈で説得できるものではなく、その人の価値観の「根っこ」の部分に関わることであり、親子でも夫婦でも強いることができないからです。

ひと昔前まで、両親がクリスチャンであれば「子どもは日曜日は教会に行くもの」でした。わたしの父は牧師であり、両親は子どもの信仰のために相当な努力をしたと思います。死の間際まで祈り続け、人間にとって一番大切なものは何かを示し続けてくれました。わたしはその祈りに深く感謝しています。兄弟は五人とも素直に小学生でバプテスマを受けましたが、それぞれの反抗期を経て、信仰においては各々の道を行くこととなります。信仰はそれぞれ各人のもの、それぞれの選び、決断だからです。

今朝一緒に開いたフィリピの信徒への手紙でパウロは「恐れおののきつつ、自分の救いを達成するように努めなさい(=己れ自身の救いを獲得しなさい)」(12節)と語ります。「己れの救い」は「己れの努め」です。他の人は祈ることはできますが、その人に代わって努力したり選ぶことはできません。ただ神はそこに深い祈りをもって関わられます。13節「あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行わせておられるのは神であるからです」。直訳は「神は、御旨の成就に向けて、願望と実行をあなたがたの中に生じさせられる」であり、意識するなら「神は、わたしの心に浮か

ぶ疑いや反発をも通して、神の御旨に導き続けてくださる」ということでしょうか。神さまは、私たちの側の「信じる自由・信じない自由」の葛藤、衝突を通してご自身の御旨に何とか導こうとなさっておられるのです。

今から約 400 年前の英国に生まれたバプテストは「個人の自由な選びである」と聖書から受け取りました。夫婦であっても教会が違うことがあります。それまで「信仰は家のもの、家族で同じであるべき」と考えられていた「国民の常識」を否定したバプテストは「あいつらは危険な連中だ」と白い目で見られ迫害を受けました。けれどもバプテストは「選ぶ自由」は「選ばない自由」とセットだと考えたのです。「選ばない自由」を認めないなら、そこに「選ぶ自由」はないからです。

英国国教会では、生まれた子どもは「幼児洗礼」を受けて神の国の一員とされました。けれどもバプテストはローマ 10 章から「人は信仰を自分の口で公にして救われる。信仰告白の伴わない洗礼には意味がない」と考えました。また国教会では幼児洗礼を授けることで「いつ病気で死んでも大丈夫。天国に行ける」と安心しました。「洗礼は救いの効力を持つ儀式」でした。それに対してバプテストは「バプテスマは、キリストと共に死にキリストと共に生きる信仰の告白であって、バプテスマそのものに救いの効力があるのではない」と理解し、「もし子どもがクリスチャンになる前に死んだらどうなるのだ？」という問いに対しては「キリストの十字架の恵みに委ねる」としました。ローマ 10：6～7「だれが天に上るか、だれが底なしの淵に下るかと言ってはならない」とある通り、人間が人の救いを判断すべきではない。「御言葉はあなたの近くにある」（8 節）。つまり私たちのすぐ近くに「御言葉」として来てくださった十字架の主の愛にお委ねすべきと考えました。

そのようにしてバプテストは、子どもが自分の意志を持ってない赤ん坊の時に洗礼をさずけてしまう道ではなく、親が子に「聖書のイエス・キリストこそ、私たちを罪の滅びから救ってくださる方だよ」と「伝えてして」いく道、そして本人が自分の口で信仰を告白するまで「祈りつつ待つ」という道を選びました。「信じる自由」の尊重は「信じない自由」の尊重と切り離すことはできません。親が子に信仰を強いるのではなく、その子の主体性を認めつつ「祈りながら待つ」。そして自分が大切にしている信仰を言葉にし行動にして「伝えていく」。それは大きな葛藤や忍耐の伴う道ですが、それでも、「信仰の自由」を大切にこそ、ご自身の御旨に私たちを導かれる神の働きにあずかることができます。バプテストは「献児式」という儀式を始めました。「献児式」では、親が子を自分たちの所有物ではなく、神から預かった大切な命として育てることができるよう、神の愛と知恵を祈り求めます。同時に教会は子を賜った家庭に神の祝福を祈り、聖書の御言葉を分かち合いつつ共に歩む覚悟を祈りであらわすのです。今朝そのような喜びの礼拝が与えられていることを心から感謝します。